学習と生活　1790－1960

――英国成人教育運動史――

Learning　and　Living　1790-1960
J. F. C. Harrison

監訳　新海英行
訳　英国成人教育史研究会
（旭多貴子・杉野利幸・杉本武之・林恭子・藤江知子）

第 2 章（その④）

（*b*）　精神的・道徳的向上

メカニックス・インスティテュートのねらいや目標における強調点の変化は、1824-5 年の当初のねらいに対する幻滅の結果だけではなかった。1834 年から 1846 年まで、政府青書の変わらない趨勢、アマチュアの社会研究家たちの報告、労働階級運動の興奮、そして、社会改革に対する全国的な起動力が「民衆の状態」に対する重大な関心を生み出した――特に、すでにメカニックス・インスティテュートのような新方式に対して共鳴していた中産階級の人々の間に関心を生み出した。彼らが「イングランドの状態という問題」に取り組むための有用な手段をメカニックス・インスティテュートの中に見出すということ以上に自然な成り行きがあったであろうか？そうした方針は、労働諸階級のための成人学習のセンターとしてのメカニックス・インスティテュートが、最終的には危険な存在になるかもしれない、という長引く疑惑を払拭させるだけでなく、そうした方針は、同じ分野において、中産階級の他の諸活動――禁酒、銀行預金、家庭経済といった諸活動――を大いに強化するであろう。もし、インスティテュートが、1824-30 年の不成功に終わった事業の遺産受取人のようなものとしてのみ、この世に現れていたとしたならば、富裕な中産階級の人々があれほどまでに気前よく自分たちの時間と金を与えて、メカニックス・インスティテュートを支援するようなことはなかったであろう。上記したような方針の変更は、メカニックス・インスティテュートが、社会において新しくかつ重要な役割を演じることができるという認識から起こったものだった。

その役割は、それが考察される角度によって、さまざまな言い方で表現され得た。成人教育はその最も広い意味において、新しい産業社会の創造に貢献するものとして価値があった。その新しい産業社会の、人間的かつ物質的な諸問題が、1848 年以前の 10 年間において、きわめて緊急で圧倒的なもののように思われたからである。特に、その構造の内部で重大な変化を受けつつあった社会というものへ人々を合理的に適応させるように援助することが、成人教育の役割であった。他の観点から見れば、メカニックス・インスティテュートを通しての成人教育は、その社会の相当広い層の至る所に中産階級のイメージを広げる手

段であった。このイデオロギーの提示は、もちろん、必ずしもこのような表現でなされたわけではなかった。ある同時代人たちにとっては、労働諸階級のための成人教育を支援する必要性は、一つの道義的義務のように思われた——それは、幸運にも自分たちの利益と一致するものであった。他の同時代人たちにとっては、「理性の進歩」に対する熱意、つまり、進歩という全般的な大義への信念が、それだけで十分な動機になり得た。一方、少数の者たちの間では、教養そのもののための教養教育の価値への信念が存在していた。

40 年代と 50 年代のメカニックス・インスティテュート運動における、これらの根底に潜む全般的な意図は、目的の公式表明の中に正規に表れるようなものではなかった。そうではなくて、それらは、年次報告書、議事録、演説、パンフレットの中での特別な社会問題に関する声明の中に見出されるものなのである。そうした問題の典型的な例は、中産諸階級を労働諸階級から隔てていた、社会的分断と物質的障壁といった問題であった。メカニックス・インスティテュートは、この問題を、解決されないまでも軽減されうる一つの方法を提示しているように思われた。というのは、それらは、

> …金持ちと貧乏人、教育を受けた者と無学な者とが出会い、お互いをよりよく理解し、そして、おそらく、互いをより深く尊敬するようになり得る、素晴らしい共通基盤を与えるからである。現代の最大の社会悪は——雇用者と被雇用者の分離である。互いの利害に対する無関心が、両者の関係の通常の状態であり、ストライキという形の激しい敵愾心が、ここ数年にわたって、きわめて頻繁に見られるこの時代の特徴になってきている[1]。

これは 1861 年のことであった。同様の考えが 1846 年にブラッドフォードでカーライル伯爵によって力説されていた。その時彼は、メカニックス・インスティテュートの価値について次のように述べていた。「…身体的状態に制限されなく、何ら階級的制限も無く、宗派に無関係で、共通の不偏不党の基盤であり、そこでは、万人が平等に、何時でも、互いの自尊心以外には何ら制限されることなく、共に集うことのできる場所…[2]」。そして、キースレイ（Keighley）・メカニックス・インスティテュートはその翌年に、異なったグループや階級間の何らかの接点のための社会的(sociological)必要を適えるものとして、同じように特徴づけられた。おそらく、幾つかの小さな町と大きな村を除いては、メカニックス・インスティテュートが、教会やチャペルに匹敵するような、社会生活のセンターになることには、決して成功しなかった。しかし、メカニックス・インスティテュートは、そういった方向で発展する可能性があるものと考えられた[3]。

---

[1] *A.R.Y.U.M.I*(1861), p.15.
[2] *Op. cit.*, p.96.
[3] *A.R.Y.U.M.I*(1848)は、次のような数字を引用している。すなわち、総人口に対するメカニックス・インスティテュートの会員の割合は、大きな町よりも小さな町と大きな村の方が大きい。例えば、人口一万を超える 16 の町では会員の割合は 1 対 53。人口 5000 から一万の 14 の町では 1 対 37。人口 5000 より下の 25 の町や村では 1 対 27。明らかに、

同様に、余暇の場合においても、成人教育の活動は、社会に現れ始めた新しくなじみの薄い問題を取り扱わなくてはならなかった。余暇が中産諸階級と貴族の特権と見なされ、そして、一日の労働時間の長さが、労働諸階級の人々に仕事以外に何かをする機会をほとんど与えなかった限りにおいて、労働者たちの余暇の過ごし方への事業がほとんど存在しなかったのは、当然のことであった。バーレイ(Bierley)の G.S.バル(Bull)師は、手織工調査委員会の委員たちに、「出席する時間の無い者たちのために、メカニックス・インスティテュート、つまり、学びのセミナリーを建てることは彼らを侮辱するだけである」と話した[4]。10 時間労働法案への闘争と早期終業キャンペーンが、適切だと期待される労働量の限度に注意を向けさせ、そして、それに関連して、労働者が現実に働いていない時間に何をしたらいいのかという問題を引き起こした。1830 年に「ビール自由取引法」制定に続くビール酒場の成功もまた、労働時間外の人々の行動に対する中産階級の関心に強い起動力を与えることになった[5]。 禁酒、合理的なレクリエーション、そして、成人教育は、同じ基本的な問題に取り組むための異なった方法であった。実際、それらは、しばしば、補い合うものとしてみなされた――サミュエル・スマイルズが、禁酒の習慣が読書に使う時間を広げ、その結果、メカニックス・インスティテュートが、こうして作り出された余暇を埋めるために必要となる、と主張した時と同じように、それらは補い合うものと見なされたのである[6]。飛翔する空想の中で、リーズの R. W. ハミルトン師は、機械の使用により、一日 6 時間の労働で国家に必要な物を十分にまかなえる時が来る、と心に思い描いていた。しかし、彼は急いで次のことを付け加えた。現時点では、労働階級の人々が夢中になれる手段は、下品で官能的な娯楽以外には無いので、そうなれば混乱が生じるであろう。それゆえ、彼らが余暇の正しい利用を適切にできるようにするためには、成人教育が必要なのである[7]。1846 年に、スカボロー・メカニックス・インスティテュートを支持して、このメカニックス・インスティテュートが、低俗な遊び仲間と暴飲から若者を引き離すような取り組みによって、彼らの余暇時間を満たす手段を与えている、と力説された。1850 年に、ヨークシャ・ユニオンは、次のような理由で、村々にある種の伝道精神を鼓舞しようとした。すなわち、メカニックス・インスティテュートは「…労働者やその他の人々が、余暇を過ごすための正しい手段の不足によるこれらの悪弊を、制圧するであろう。彼らは、物憂い空虚や有害な習慣が、労働者の余暇を奪っている多くの家庭に良書を持ち込むであろう…[8]」

「民衆の状態」に対する中産諸階級の関心は、民衆の悲惨さへのキリスト教的、人道主義

村の成功したメカニックス・インスティテュートは、大きな町よりも容易にコミュニティ全体の中心になることができた。それは、社会生活の中心の多くの中で唯一のものであった。

[4] *Report of the Assistant Handloom Weavers Commissioners* (1840),Ⅲ, 568.

[5] P. T. Winskill, *The Temperance Movement and its Workers,* 4 vols. (1891), Ⅰ, 18.を参照。

[6] *Report of the Select Committee on Public Libraries* (1849), p. 125.

[7] *Op. cit.*, pp.108-9.

[8] *A.R.Y.U.M.I* (1850), p.11.

的同情だけによって喚起されたのではなかった。懸念という要素――時には深刻な恐怖という要素もあったのである。成人教育は、このように、ほとんどの中産階級の自由主義者たちにとって、社会の警官としての付加価値もあった[9]。ブラッドフォード・メカニックス・インスティテュートにおいて、ジェームズ・アクワース師は、次のように論じた。労働諸階級の間の成人教育は、彼らを財産権の破壊者にするというよりはむしろ、尊重者にするであろう。また、成人教育は、社会における当然で不可避な不平等について、より広い理解をもたらすであろう。彼は、1837 年の不況と失業の期間におけるブラッドフォードの労働諸階級の柔順さと、初期のラッダイト運動の参加者たちの暴力とを比較した。そして、その差異は、主として、労働諸階級の間の「知識の広がり」のためである、と結論付けた[10]。1842 年 8 月のプラグ・プロット暴動(Plug Plot riots)の期間に、メカニックス・インスティテュートが抑制的な力を果たしていた、としばしば述べられた。そして、1859 年に、ヨークシャ・ユニオンによって同じ教訓が教え込まれることになっていた。つまり――「最近の財政危機の期間ほど、このインスティテューションの価値の、説得力ある証拠が与えられたことはなかったであろう。その危機の時、数多くの人々が職に就けなかったにもかかわらず、ほんの少しの法律違反も起こらなかったし、そうした苦難に対する何らの懸念も抱かれなかった。20 年前ならば、軍隊の出動が必要であっただろう。しかし、1858 年には、警官の増員も必要ではなかった[11]」。さまざまな同時代の改革者たちは、無知（非識字）と犯罪との関係を明らかにすることに大いに悩んだし、この事例を、成人教育機関のために論ずることに大いに悩んだ。R.W.ハミルトン師は次のように断言するに至った。「明々白々な証拠が公表されている。つまり、犯罪は民衆の知的道徳的粗野と比例して進行している」。けれども、彼が引用した統計は、それほどまでに強調された結論をほとんど裏付けていなかった[12]。犯罪統計が、実際にそういった意見を保証するに十分なものであったにしろ、なかったにしろ、そのことは一般的に証明された事実として受け入れられていたし、警官を補助するものとしての教育を弁護するために、この事例はこのように提示されていたのであった。

1844 年に、そして、再び 1846 年に開かれたヨーク巡回裁判において、いずれの場合も、巡回裁判官によって、犯罪の最大にして唯一の原因は飲酒である、と述べられた[13]。スマイルズは、禁酒と成人教育との関係を指摘した[14]。そして、彼が学院長をしていたウッドハウ

---

[9] このフレーズは John Wade の『中産諸階級と労働諸階級の歴史』（1833）p.496.から引用されている。そこには、教育は「犯罪、困窮、無知の主たる種を破壊するという理由から社会の警察の最良の形」として記述されている。

[10] 議事録の記述による…。p.25.

[11] *A.R.Y.U.M.I*（1859), Appendix D, p.26.

[12] *Op. cit.*, p.99.　An article on '*Education and Crime'* in the *New Moral World*, 9 March 1839, and James Hole, *Light More Light!*（1860), pp.91-2.も参照。

[13] William Hoyle, *Crime in England and Wales in the 19th Century. An Historical and critical retrospect*（London and Manchester, n.d.), pp. 106-7.

[14] この段落の詳細は、*A.R.Y.U.M.I*（1849, 1850, 1854）と Winskill の前掲書による。また P.T.Winskill,の *Temperance Standard Bearers of the Nineteenth Century*, 2

ス・メカニックス・インスティテュートの成功は、その地域の禁酒協会との密接なつながりに負っていると言われた。そのつながりが、人間の進歩のためにその二つの団体が互いに助け合うことを可能にした、というのであった。ミドルズブラでは、メカニックス・インスティテュートの管理者たちが、1850 年に次のように言明した。「我々もまた、我々自身、この町の禁酒協会の熱心な、好結果をもたらす骨折りに大いに恩恵を受けていると感じている。そして、そうした協会が常にメカニックス・インスティテュートの進展への最も効果的な開拓者であることが判明するであろう、と我々は確信している」。ヘブデン・ブリッジでは、メカニックス・インスティテュートは、禁酒運動の活動家たちによって開始された。リーズ、ブラッドフォード、ハリファクスにおける禁酒運動の主導者たちは、それらの地域のメカニックス・インスティテュートの管理者か活発な活動家たちであった。リーズ全面禁欲協会(Leeds Total Abstinence Society)は、1841 年の間中、リーズ・メカニックス・インスティテュートの一室で、毎週会合を開いた。そして、ブラッドフォード長期誓約絶対禁酒協会(Bradford Long Pledge Teetotal Society)は、1854 年にメカニックス・インスティテュート・ヨークシャ・ユニオンへの入会を認められた。その二つの運動間のきずなは、それらの共通の職員を通して、このようにきわめて緊密であった。そして、目的が類似している傾向もまた明らかであった。多くの中産階級の支援者にとって、この二つの運動は、同じ大きな目的に向けられた活動のための、異なった路線に過ぎないものになってきた。しかし、成人教育との関連における禁酒運動の主要な意義は、労働者たちを、彼ら自身とその環境から救い出す一つの試みとしてあったのではなかった。むしろ、その意義は、正統的な政治経済学の教義とマルサス主義の理論とを、労働階級の人々の生活の状態に適用することの現実的な証明なのであった。ほとんどの禁酒運動の活動家は、疑いもなく飲酒の諸悪から労働者を更生させようとする願望において、真剣そのものであったが、「民衆の状態」を矯正しようとする彼らの議論の力や、彼らの活動の存在理由は、政治経済と人口問題という本質に関する、何かある種の隠された想定が考慮に入れられる時にはますます強まるものなのである。

政治経済学の「健全な」諸原理を教え込むためにメカニックス・インスティテュートを使おうという願望は、その運動のそもそもの開始時点から、幾人かの中産階級の創設者たちの心の中に宿っていた。ロンドンでは、ブルームはその新しいメカニックス・インスティテュートは、性質上、技術的・科学的であるだけでなく、正統的な政治経済学の真理の容認に基づくべきである、と意図していた[15]。1825 年の夏の間、彼は政治経済に関する講義のコースを準備した。それらは、後に、国中の全ての地域において、多くのメカニックス・インス

---

vols.(1897), も参照せよ。それは、およそ 7,000 名の禁欲する労働者の簡易な自伝の詳細な記述について述べている。

[15] この視点は、ロンドン・メカニックス・インスティテュートにおける闘争なくしては優位に立つようにはならなかった。トマス・ケリー『ジョージ・バークベック：成人教育の先駆者』（リヴァプール、1957）, chaps.5,6; E.Halevy,『トマス・ホジスキン(1787-1860)』A.J.Taylor 訳(1956) pp.87-91.と、トマス・ホジスキン『資本の危機を防ぐ労働…』これは G.D.H.コール(1922), pp.9-11.によって紹介された…を参照せよ。

ティテュートで読まれた。彼の『実際的所見』(p.5) の中で、彼は、彼の「リーズの尊敬に値する友人であるマーシャル氏」に、「労働階級の人々が使用するために、経済学の諸原理に関する小さな初歩的入門書」を出版してみてはどうかと勧めた。ここで言われているその書物とは、マーシャルの『社会生活の経済』であり、「労働諸階級の人々に理解できるように、明快で親しみやすい書き方で、政治経済学の最も重要な諸理論を説明しようと意図されたもの」であった。「人口と賃金との真の原理と相互関係」に関するマーシャルの講義は、リーズ・メカニックス・インスティテュートの最初の学期における経済学の科目の唯一のものであり、次の学期にはそういったものは何一つ行われなかった。しかし、1826-7 年には、4 つの講義録が読まれた。それらは、ロンドン・メカニックス・インスティテュートのために準備されたコースから選ばれたもので、分業、富の性質、富の産出、富の分配、利潤と賃金の割合といったテーマに関する講義であった。これらの講義は、「…コミュニティの福祉と最も深く結び付いてはいるが、危険な誤りに最も陥りやすいテーマの幾つかについての進んだ見解を含んでいて、興味をもって傾聴され、明らかによく理解され、正しく認識された[16]」

これらの講義に対するリーズの労働諸階級の一般的な反応は、彼らに提供されていた高度な科学の講義に対するのと同様に、熱狂的なものではなかった。しかし、「民衆の誤り」を訂正するための、そのような講義の必要性を、中産階級のメカニックス・インスティテュートの管理人たちは非常に痛切に感じていた。そして、次の 20 年間の出来事が、この信念を確かなものとした。戦闘的な労働組合主義、ストライキ、そして時短委員会は、労働諸階級が社会的な、そして経済的な生活を支配する「自然」法を理解していないこと、そしてその結果、彼らは容易に「アジテーター」の餌食になることを明確に示していた。問題は主として教育的なもの、つまり、経済諸法に関する人々の無知を一掃することであった。もし、賃金基金理論の意味することが十分に説明され得るならば、そして、工場の終業時間、総利潤の供給源が明確に示されるならば、労働諸階級の人々は、労働組合によって賃上げをはかることの無益を確信するであろう。そして、一日の労働時間を削減することは避けがたい天罰であることをはっきりと知るであろう。もしも、束縛から解放されることの必要性と、競争の有益な結果とが明らかにされるならば、「社会主義的であれ、共同的であれ、人工的なシステム[17]」の魅力は姿を消すであろう。アダム・スミス、リカードゥおよびマルサスの教義のような新興中産諸階級の人々を非常に引きつけた経済的教義が強く支配していた時代には、それらの教義がひとたび論理的に説明されても、こうした理論の現実的な力を認めるのを拒むことは、単に鈍感としか思えなかった。それらの正に「当然さ」は、それらの教義を議論したり、疑ったり、といった領域からひき離した。それらは討論されるべき仮説ではなく、説明され、容認されるべき真実であった。問題は、労働諸階級の間に、これらの真実

---

16 *A.R.Leeds.M.I* (1827), p.6.

17 John Hill Burton, *Political and Social Economy : its practical applications* (1849), p.222.

をいかにして最も効果的に広めるか、という伝達方法であった。メカニックス・インスティテュートはこの仕事に対する有用な手段を提供するように思えた。それらはマーセット夫人の『政治経済学に関する対話』、ハリエット・マーティノゥの『例解・政治経済学』、チャールズ・ナイトの『産業の権利』や『機械の成果』と並んで役目の全てを担った。

ハリファクスにおいて、1833 年にメカニックス・インスティテュートの役割がはっきりと認識された。政治経済学のクラスに関する提案が、そのメカニックス・インスティテュートの年次総会で熱烈に歓迎された。ただし、結局は、それが実際に始まることは決してなかった。政治経済学のクラスに関する意見を載せた大判新聞[18]がメンバーの中で読まれた。そして、その総会において、その発起人であるジョウゼフ・ドーソン（Joseph Dawson）によって正式に動議された。「政治経済学の利点、本質、対象」を示すために、マカロックによるアダム・スミスの『諸国民の富』への入門書から引用した後に、ドーソンは、そのようなクラスは、メカニックス・インスティテュートに政党政治を導入するであろう、そして、いずれにせよ、工員諸階層には役に立たないであろう、という予想されていた反対意見に反駁した。彼はそれからこう続けた。「政治経済学は、多くの政治問題上の誤った見方を正すであろうと私は認めています。そして、それこそが、賛成して推進されることができる最大の勧告の一つであると考えています」。労働諸階級の人々が、彼らの不可避の困難が理解され、軽減されるために、政治経済学の本質を正しく認識すべきであることは、とりわけ重要であった。

> 資本の蓄積と分配――利潤と賃金の割合――地代と税金の原理――全ての交換可能な商品の価値、を規定する広い原理は、あらゆる社会の生産諸階級、とりわけ工員諸階層に関わる問題に勝った原理である。というのは、彼らの状態が、より耐え難く、より緩和しづらくされているのは、彼らがそれらの原理を知らないためである。それゆえに、これは、工員諸階層にとってあらゆる知識のうちで最も有益なものになるであろう。それらは彼らが最も無知であり、しかも最も必要としているところの知識なのである。

富の分配、機械の使用、地代と賃金を規定する「基本的諸原理」が広く理解されるまでは、社会は「…意見の不一致と社会悪によって絶えず引き裂かれる」であろう。

同様の見方が R.W.ハミルトン師によって述べられた。成人教育が、特に政治経済学について教授することが、「賃金の上昇や労働時間の短縮」について煽動する労働階級のリーダーたちを生み出すだろうという懸念は、彼には根拠のないことのように思えた。反対に、そのような教育だけが労働階級の人々に正統的な政治経済学の偉大なる真実を正しく理解させることができるだろう。そうして、彼らをそのような煽動者の悪影響から守るであろう――「肉体労働者に彼らの真の利害を知らしめよう。肉体労働者に彼らを襲う必然的なそし

---

18 題して『ハリファクス・メカニックス・インスティテュートにおける政治経済学の学級を形成する提案』。この段落の後半の引用文はこの大判新聞からである。

て偶発的な危険因子を知らしめよう。そうすれば、その煽動者は、彼の術策が無駄だと知るであろうし、この人騒がせな人物は、彼の予言が無駄であったと確信するであろう[19]」。講義原稿の収集が 1843 年にメカニックス・インスティテュート・ヨークシャ・ユニオンによって開始された。それは講師がいないときに会員が朗読するように意図された、少量だがかなりの経済科目が含まれていた。そこにはブルームによる政治経済学原理に関する 13 回の講義シリーズも入っていた。機械が失業と賃金低下をもたらしたという主張に反論するために、P.ホースマン(P.Horsman)による「機械とその社会的影響」に関する講義が計画された。出版可能な原稿の最も初期のものの中に、リーズの自由党指導者で自由貿易主義者のトマス・プリント(Thomas Plint)による「政治経済学を軽視することから起こる害悪について」の講義があった。ヨーク・メカニックス・インスティテュートは 1844 年に、機械の恩恵に関する二つのエッセイに賞を与えた。そして、これらのエッセイはヨークシャ・ユニオンの全てのインスティテュートで読むことが出来るであろうと公表した。「…そして、それに関する最もひどく有害な誤りが今なお工員たちのうちの多くの者の間に、不幸にも広がり続けているという問題に関するテーマが取り扱われているが、それに対する筆者の能力と見解の包括性は、それらを精読する人すべてに明らかになるであろう[20]」

それにもかかわらず、講義という手段によって、社会的・経済的生活の現実に関するそのような致命的な誤りを根絶しようとする試みは、直ちに成果をあげるものではなかった。議論の余地ある経済的政治的トピックスに関する自由討論を認めることは、あまりにも危険に思えた。けれども、それこそがまさにメカニックス・インスティテュートが最も獲得したいと切望していた、高度に知的な職人というあの少数の人々にとって非常に魅力があるトピックスであったのだ[21]。中立性という公的方針へ回避策がとられた。そして、議論の余地ある政治学や神学は、ほとんど全てのインスティテュートの規則で明白に禁止された。しかし、これは、講義においてであれ、図書室の書籍であれ、非正統的見解のみを排除するものと解釈された。正統的な政治経済学についての講義は、政治的トピックスを除いては禁制とはならなかった。なぜなら、政治経済学の諸原理は、議論の余地あることとは意識されなかったからである。たとえば、政党政治の問題は、選挙権の問題であった。議論の余地ある神学や政治学の本の容認を禁じる規則があったにもかかわらず、ブラッドオード・メカニックス・インスティテュートの図書室には、バベッジ、マカロック、ユア、マルサス、ハリエット・マーティノウ、ミル、シーニアー、その他の著書が十分に収蔵されていた。ロバート・オウエンの著作も、主要な協同組合社会主義者やリカードゥ派社会主義者による著作も全く無かった。ホジスキンは『健康講座』のみ、そして、コベットは『コテージ経済』と文法

---

19 *Op.cit.*, p.99.
20 *A.R.Y.U.M.I.* (1844), p.10.
21 「すべての討論あるいは政治学や経済学に関する教授さえも排除することが、メカニックス・インスティテュートに対する職人の無関心のもう一つの原因である」という見解については、トマス・コーツ著『イングランドにおける文芸・科学・メカニックス・インスティテューションに関する報告』S.D.U.K.(1841), p.14.を参照。

書と、非政治的著作のみが代表的に選ばれていた。メカニックス・インスティテュートにおいて、政治経済学を教えてほしい、教材で解説してもらいたいという要求は、このように非常に制限された。労働諸階級の大多数にとって、提供された科目は、たやすく理解するにはあまりに高度過ぎた。その教義を習得できた少数の職人たちにとっては、それは疑わしいものであったので、彼らは、手引きを求めて他の場所へと向かった[22]。そして、事務員、店員、下層中産階級の人々は、経済的生活の厳しい現実を分析するよりも、そのささやかな改良や、そこからの逃避の方を強く望んだ。それにもかかわらず、メカニックス・インスティテュートは、とにもかくにも政治経済学の諸原理を普及するための重要な担い手であるべきだという感覚は、中産諸階級の間に残っており、そして、この考えは 60 年代になってもまだ追い求められ続けていた[23]。

より巧妙に考え出され、より遠回しに表現されたものは、メカニックス・インスティテュートの任務が目指すべき、中産階級の他の幾つかの社会的諸目的であった。これらの中の最も重要なものは、人口と生活水準との関係という問題であった。新しい政治経済学は、ストライキ、労働組合、工場規制による賃金上昇の可能性を除外していたので、彼らの状態を改善する何らかの他の方法が、労働諸階級に提供されなければならなかった。このことは、労働力の供給削減の中に見出された。需要と供給という動かしがたい法則が、労働力の過剰がある限り賃金は上がらないと定めていた。つまり、労働力の供給を削減することが、賃金を上げさせることができるかもしれない唯一の方法であった。この人数の削減に影響を与える三つの可能な方法のうちの最初のもの、つまり、戦争や伝染病による削減は、人道主義、そしてキリスト教の立場から拒否された。第 2 番目の方法である移住は、熱狂的な少数の支持を得た。しかし、第 3 番目の方法、つまり、「道徳的自制」は、最も強く中産諸階級に訴えた。というのは、彼ら自身の実践と一層一致してくるものであり、そして、道徳的指針という盤石の強さで提示され得たからであった[24]。中産諸階級の間の結婚という問題に関する考え方の変化が、1830 年代に認められる。早婚と大家族という 18 世紀的祝福は、結婚して実際にやりくりできるまで、つまり、最適の収入が達成されるまでは結婚を遅らせる、という考えに道を譲った。「無分別な」（つまり、あまりに早期の）結婚は、中産階級の生活水

---

[22] ハッダーズフィールドにおいてさえ、このことは当てはまった。そこではメカニックス・インスティテュートが、その惹きつけた学生たちのタイプとしては純粋に労働階級のインスティテューションの存在に最も近いものであった。この問題について W・M・Nelson（ハッダーズフィールド・メカニックス・インスティテュートの教師）によって、John Minter Morgan 宛に書かれた手紙については、『キリスト教社会主義者』1851 年 3 月 15 日号、p.155.を参照。

[23] W.H.J.Traice （リーズ・メカニックス・インスティテュートの前書記）の『Y.U.M.I のために準備された…M・Ｉの手引き』第 2 版（1863）p.11.を参照。ロンドン労働者カレッジにおけるこの観点の議論のためには J.F.C.Harrison の『労働者カレッジ史　1854－1954』（1954）pp.61-2.を参照。

[24] J.A.Banks , *Prosperity and Parenthood: a study of family planning among the Victorian middle classes* (1954), especially pp.29-31.を参照。

準として受容されるようになってきたものの維持を不可能にするかもしれないだろう。そして、そのような結婚は、1850 年頃には、賢くないばかりでなく、不道徳であるとみなされるようになっていた。同様に、もし、労働諸階級がその生活水準を改善したいならば、彼らもまた同じ道徳的自制を遵守すべきであった。

中産諸階級の行動に倣うようにという労働諸階級へのこの助言は、「人口抑制」の別の方法が存在するという知見によって、いよいよ有無を言わせぬ急務となった――　その上、中産諸階級はその方法を支持しようとしなかった。19 世紀後半になって初めて、中産諸階級は、人工的な避妊方法を擁護する覚悟ができた。しかし、フランシス・プレイスの産児制限の活用を主張するチラシは、1823 年からウェスト・ライディングで読まれていた[25]。プレイスは労働階級の生活水準を向上させるために、人口抑制をする必要があるという、政治経済学者たちの議論を受け入れたが、結婚を遅らせるという方法によってこれを達成する可能性は否定した。彼は結婚前の長期に亘る禁欲生活は実行不可能であると考えていたので、唯一の救済策は早い結婚と人工的な避妊であった。そのような考えがヨークシャの労働諸階級の間に大いなる進展をもたらしたとは、ありそうもないことであるが、その問題に関する本やパンフレットが 30 年代と 40 年代のウェスト・ライディングで売られていたし、「ノーザン・スター（*Northern Star*）」紙の中で宣伝されていた。そして、中産階級のサークルの中で、この話題が持ち出された時にはいつでも、その背後にこのような宣伝の情報が潜んでいた。さらに、中産諸階級は、自己抑制は不可能であるというプレイスの想定を否定し、労働諸階級は、自己の欲情を抑制している裕福な人々を手本にするべきであると提唱した。けれども、このことは、多くの労働者に実に多くのことを要求していたことを示す証拠が、あまりにもたくさんあった[26]。説教よりももっと現実的にその問題に取り組む何かが必要だっただろう。そして、禁酒と成人教育の諸運動が貢献したのはこの点であった。

禁酒と人口稠密との関係はかなり直接的に結びついていた。泥酔の発生の減少は、とりわけ週末においては、労働者の間の過剰な性交渉を減らす傾向がある、と正しくも判断された。諸メカニックス・インスティテュートは、禁酒運動ほど明白ではないが、同様に重要な役割を演じた。「分別のある」結婚という考え、そして婚約中の節制という考えは、労働諸階級が中産諸階級の習慣を見習おうと積極的に望んだ時に、そして、中産階級の考え方や価値観の何かを実際に吸収した時にのみ、彼らに理解されたのであろう。このことはつまり、メカニックス・インスティテュートで普通に見られるような雰囲気の中で、労働者は最善を尽くすことができた、ということであった。そこでは、異なった社会諸階級間の触れ合いのため

---

[25] N. Himes,'The Birth Control Handbills of 1823',*The Lancet*,6 Aug.1927；Richard Carlile ,'What is Love？' *Republican*,6 May 1925 (reprinted in G. A. Aldred ,　*Jail Journal, and other writings by Richard Carlile* (Glasgow,1942) ,p.72；Francis Place, *Illustrations and Proofs of the Principles of Population* (1822),ed. with notes, by N.E. Himes,1930,pp. 10-11,325.

[26] 彼らの最も好意的な観察者でさえも、イングランドの労働者の最大の弱点は飲酒と性交渉の過多であると認めていた。エンゲルス、前掲書 p.128.を参照。

の適切な「中立的な場」を提供していたからであった。40 年代には、こうした理由からメカニックス・インスティテュートはしばしば宣伝された。1851 年 1 月 1 日付の宣伝用パンフレット『メカニックス・インスティテュートの長所について労働者諸君に告ぐ』の中で、（メカニックス・インスティテュート・ヨークシャ・ユニオン会長の）エドワード・ベインズは、まさにこうした言葉でその魅力を述べた。彼のとった方法は、怠惰な徒弟と勤勉な徒弟という古いテーマをなぞったものであった。最初に彼は軽はずみな結婚の愚かさと惨めさについて述べた。「ある家族は、その最初の一歩が間違っている。夫と妻は、まだ少年と少女で家計を支える準備もしていないときに結婚する」。その結果、粗末な住居、欲求不満、惨めになるように生まれついた子ども、酒場への入り浸り、悪徳と貧困への急速な転落が連続して起こる。それに対して、「別のある家族は、家庭生活を慎重に開始し、順調なスタートをする。勤勉な夫は倹約家の妻に給料を渡す。質素な家は清潔である…」棚には何冊かの本が並び、「酒瓶はない」。しばらく経つと、「…かわいい子どもたちがその家に活気を添える。彼らはまともな服装、十分な食事が与えられる…」。やがて、この子どもたちは学校へ通い、給料は貯蓄銀行や疾病互助会に預けられる。いくつかの棚にはもっと多くの本が並び、男の子はメカニックス・インスティテュートに入学する。そして最終的に、その幸せな職人は「…家屋所有者――土地自由所有者、そして有権者」になるのである。メカニックス・インスティテュートが提供するべきは、このような便宜なのである。

1850 年には、官能的な喜びから労働諸階級を引き離すことは、メカニックス・インスティテュートの存在を正当化する根拠として一般的に言われるようになった。1847 年のリーズ・メカニックス・インスティテュート・デザイン学校設立の論拠として、このことが利用された。「…我々の美の感覚を洗練し、そして、官能的喜びから精神を分離するものは何であれ、すべてある程度、我が国の尊厳を推進するに違いない」。1854 年のヨークシャ・ユニオンの年次報告は、ある町の住人たちの知的要求を満たす手段がなにもないところでは、全ての階級の人々が苦しんでいる、と述べた。また、「より低い階級の人々」は「…苦役と官能的喜びに完全に飲み込まれている」と述べた。1856 年には再び、メカニックス・インスティテュートの訴えは、「…酒におぼれることや、過度の情欲」から人々を必ずや引き離す、ということであった。ジェイムズ・ホウルは同様の意見を表明した。そして、ヨークシャ・ユニオンの代理人であり、講演者であるバーネット・ブレイク(Barnett Blake)は、村立図書館計画を支援するよう促した。それは「…村人たちの心を高め、健全な魅力によって官能的な喜びから人々を引き離すだろう」という理由からであった。

「…知性の洗練された喜びが、官能的で下品な娯楽との競争で成功するまともな機会を確保する[27]」というこの願いは、そのインスティテュートにおいて、科学的科目に対抗して文芸的科目に集中する決意を一層強めた。中産階級の同時代人たちが、その新しい機械時代の限界を実感し始め、そして物質的進歩と文化的啓蒙とを結びつける必要性を感じるにつれ

[27] *A.R. Bradford M.I* (1854), p.4.

て、趣味を洗練するものとしての芸術の役割は、次第に高く評価されるようになった。機械仕掛けの余興はまだほとんど知られていなかったので、彼らは生活における伝統的な文化の要素として、文学や美術に向かった。メカニックス・インスティテュートというものが、淫らで官能的な楽しみから労働者たちを引き離すという使命があるならば、詩、音楽、美術は、数学や自然科学よりも、成功の一層の希望を提供するように思われた。R.W.ハミルトン師は次のように述べた。「趣味の洗練は、極度の重労働に従事させられている階級の間で育まれるであろう。芸術が豊かなところはどこでも、この洗練は生活の最も低い階層に降りていく…。音楽、絵画、彫刻への愛は、その高貴な見本が彼らに普及した時に、その最も対象になり得ないような人々の心にも育つ――　そして、この優雅さは、淫らな感情や態度と幸せな交換をすることがないであろうか？[28]」。芸術は、メカニックス・インスティテュートにおいてあまり重要な科目ではないという考えから離脱することは必ずしも簡単ではなかったが、一旦、それらの追及を促進する決定がなされたならば、講演者も聴講者も見つけ出すのに困難はほとんどなかった。1849 年にリーズ・メカニックス・インスティテュートは講演コンサートシリーズの第 1 回目を行った。そして、「出し物と出し物の間で、ボイズ氏は、そのインスティテューションで教えられる諸科学に音楽教育を加えることによって期待される諸利益について話をした。そして、下品で官能的な性質の楽しみに代わって、精神を向上し洗練する喜びによる…芸術の啓蒙的影響について、思慮深く詳細に話した[29]」

自制によって貧困を解決するという中産階級の助言を、メカニックス・インスティテュートを通して宣伝することがどの程度まで成功していたか、今となってはそれを評価するための信頼性ある手段は何もない。成人教育は、中産階級の規範と価値を普及するための数ある手段の中の一つに過ぎなかった。そして、メカニックス・インスティテュートは、成人教育のための教育機関のいくつかの異なった型の一つに過ぎなかった。成人のための田舎の夜間学校は、しばしば同じような社会的動機によって、とりわけ、農業労働者の間の不道徳と無責任さを抑制しようとする願望によって鼓舞されていた。図書室が備わった成人夜間学校が、何名かの工場所有者によって維持された[30]。そして、ハリファクスにおいて労働者カレッジがエドワード・アクロイド(Edward Akroyd)によって設立され、支援され、1885 年から栄えた[31]。女工用のリーズ縫製学校のような試験的事業は、中産階級の女性たちによ

---

28 *Op. cit.*, p.75.

29 *Leeds Mercury*, 24 March 1849.

30 スマイルズは、「公的図書館に関する特別小委員会の報告（1849）」の p.127.で、マーシャル(Marshall)がリーズの工場における成人教育のために便宜を提供したことを述べている。同様の便宜が、Burley-in-Wharfedale のフォスターの工場においても提供された。T・ Wemyss Reid『*Life of W.E.Forster*(1889)』p.155.を参照。

31 アクロイドは F・D・モーリスからこのカレッジの着想を得たと述べているが、実際はロンドン労働者カレッジというよりもちょっと進んだ夜間学校に似通ったものだった。*A Handy Book descriptive of the various Institutions in Haley Hill and Copley* (Halifax,1865)を参照。ヨークシャにおける、労働者カレッジの他の唯一の例は、シェフィールドにあった。それについては、G.C. Moor Smith, *The Story of the People's*

って始められた[32]。そして、成人教育のための、かなりの中産階級の努力がチャーチ・インスティテュートや成人学校のような宗教団体の教育機関に向けられていった。これらの特別に成人教育的な試験的事業を越えて、広い意味での教育的な他の事業があり、それらは同じような目的に向けられていた。有用知識普及協会の出版物、チャールズ・ナイト、ジョン・カッセル、そしてチェンバーズ兄弟社の向上のための文芸作品、キリスト教知識普及協会、宗教トラクト協会、そして、ハリエット・マーティノウによるトラクトとパンフレット――これらすべてが、その産業の地域中で読まれた。そして、ブルーム的で福音主義的な考えを広めることに役立った。その最終結果は、力強く、そして持続された、中産階級のイデオロギーの宣伝であった。

College, Sheffield, 1842-1878(Sheffield,1912)を参照。

[32] Mrs. Hyde, *How to Win our Workers. A short account of the Leeds Sewing School for Factory Girls* (Cambridge and London, 1862) を参照。